東京学芸大学紀要　芸術・スポーツ科学系　**71**: 69－78，2019.

子ども理解を深める親子ワークショップの実践

―― 学芸の森保育園での遊具を使ったワークショップ実践の考察に基づいて ――

小室　明久＊1・笠原　広一＊2・鉄矢　悦朗＊2・真木　千壽子＊3・加山　総子＊4

美術科教育分野

（2019年6月19日受理）

KOMURO, A., KASAHARA, K., TETSUYA, E., MAKI, C. and KAYAMA, M.: The Practice of Parent-Child Workshops to Deepen Parental Understanding of Children: Based on consideration of the workshop using playthings at Gakugei-no-mori Nursery School. Bull. Tokyo Gakugei Univ. Division of Arts and Sports Sciences., **71**: 69–78. (2019)　ISSN 2434–9399

Abstract

The objective of this research is to develop a parent-child workshop to produce deeper parental understanding of children via the activities implemented at nursery schools. Recently, early childhood care and education use documentation and portfolio to highlight the intention and process of children's daily activities. It is also necessary to develop effective practical methodologies to develop parental understanding of children to promote the quality of life and well-being of children. The settings to promote awareness and understanding in this workshop are as followings;

・Parents observe children play and participate via playing with children.

・Using simple building blocks with vivid colors for form making and to promote imaginative play.

・Parents use FM transmitted radio earphones to hear real time explanations of the status of playing children from the nursery school teacher and university faculty.

As a result, through this workshop, parents played with children while experiencing their feelings within the process of playing. Parents were able to be aware of multiple other aspects of children and the meaning of their actions. The data of a questionnaire showed that parents noticed various characteristics and sensibilities of children. As a conclusion, it could be said that these methodologies of simultaneous informing and participatory experiences are effective means to produce and promote parental understanding of children.

Keywords: art education, early childhood care and education, parental understanding of children, parent-child workshop

Department of Art Education, Tokyo Gakugei University, 4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo 184-8501, Japan

要旨： 本研究は大学内の保育園と大学教員が連携し，保護者が幼児の多様な感性や個性に気づき，子ども理解を深めていくための親子ワークショップを企画実施し，その成果を考察したものである。積み木のような遊び方ができる「シティーブロックス」を用い，子どもの遊ぶ姿や工夫などを保育者と大学教員がリアルタイムでFMワイヤレスマイク

＊1　中部学院大学短期大学部（501-3938 関市桐ケ丘2-1）
＊2　東京学芸大学 美術・書道講座 美術科教育分野（184-8501　小金井市貫井北町 4-1-1）
＊3　特定非営利活動法人 東京学芸大こども未来研究所 学芸の森保育園（184-8501　小金井市貫井北町 4-1-1）
＊4　東京学芸大学 個人研究員（184-8501　小金井市貫井北町 4-1-1）

を通して保護者のイヤフォンに解説を送った。その結果，家庭での姿とは異なる園の日常に近い中での新たな子ども理解や，子どもの遊びについての新たな理解が生まれた。この活動が他の親子との交流の機会にもなり，共に遊ぶことを通した活動が子ども理解を生み出す実践的方法になることがわかった。今回は実施できなかった保護者との振り返りが今後の改善点であるが，こうした実践は新しいアクションリサーチの伝達ツールにもなることが示唆された。

1．はじめに

本研究は2018年11月22日（木）に東京学芸大学内にある学芸の森保育園にて行った，子ども理解のための親子ワークショップ「ならべる，つなげる，つみあげる―子どもの成長に立ち会おう―」の実践を考察したものである。

同園では2016年度から大学教員と連携造形活動に取り組んできた。年間約10回の造形活動と作品展の取り組みを通して，保育者や保護者が乳幼児の多様な感性や個性に気づき，子ども理解を深めていくための取り組みを積み重ねてきた。こうした取り組みが，園の造形活動の充実のみならず，展覧会づくりやカンファレンス等を通して保育者の学びと成長にもつながるものであることが確認された（笠原・真木・鉄矢・小室・塚本，2018）。こうした取り組みと研究の中で，表現を通して表出・表現される子どもの気持ちや考えを，表現活動を通して理解していく取り組みを積極的に保育に位置付けていくことで，保育者と保護者が共に子ども理解を共有し深めていく契機になるのではないかと考えた。

子どものアイディアや試行錯誤のプロセスを，アートを通して視覚化し共有していくレッジョ・エミリアの実践（Edwards, et al., 1999; 笠原，2005）が広く知られているように，そこで用いられたドキュメンテーション（諸川ら，2016）やポートフォリオ（森，2016）などの取り組みは，保育や子どもの姿を，保育者の視点や意図を可視化し，カンファレンスを通して保護者も共有し，同僚との保育実践の省察にもつながる取り組みになるとして，この四半世紀間に広く共有され，保育者養成でも不可欠の考え方であり技術となってきている経緯がある。

学芸の森保育園での連携造形活動では三年間かけて，当初作品の展示だけだった作品展に，二年目にはキャプションや発達的な情報に基づく展示構成を盛り込み，園長と連携造形活動の大学教員に加え，3～5歳児担当の保育者も交えた「子どもアートカンファレンス」での実践報告会を保護者対象に実施した。さらに三年目となる今回（2019年2月）の作品展では，活動状況を伝えるドキュメンテーションも展示に組み込み，子どもアートカンファレンスでは0，1，2，3～5歳のすべてのクラスの保育者が実践報告を行うに至った。表現活動の背後にある日々の子どもの姿や保育者の意図や看取りを，写真や作品を基に保護者に伝え，それについて話し合い，保護者の言葉やエピソードとともに考えながら，より豊かで奥行きのある子ども理解を生み出していく取り組みが実現した。

こうした取り組みは現在多くの園でも行われているが，同園は開設して年数が浅いこともあり，大学教員も連携したアクションリサーチとして，園の保育の充実とあわせて段階的に取り組んできたところである。

そしてこうした取り組みに対して，公益財団法人日本生命財団より平成29年度委託研究として助成を受けることとなり，「幼児教育における子どものアート活動を媒介とした多様性の涵養と親の学習支援プログラムの構築」と題して，造形表現，アートに基づく子ども理解の取り組みを，保育者や保護者へと広げていく実践方法を構築し，園の活動へと社会実装していく実践的な研究に取り組むこととなった。ここまで6回ほど外部講師を招いた研修会や講演会を行ってきた。今年はそれに加え大学教員と園長が実際に親子活動の中での遊びの様子を小さなFMワイヤレスマイクを通してリアルタイムに解説し，それを保護者がイヤフォンで聞くという実験的なワークショップを試みることにした。

そこで本論文では，在園児親子と行ったこの「ならべる，つなげる，つみあげる―子どもの成長に立ち会おう―」のワークショップの実践が，保護者にどのような子ども理解を生み出したか，保育現場における子ども理解の共有化のための方法としての可能性を考察した。

（笠原広一）

2．実践の概要と研究の方法

本実践は保育園で例年5歳児組が行っている「星空パーティー」の活動に位置付けられ，夕方に行う親子活動である。今回のワークショップは子どもの遊びの様子を保護者にワイヤレスマイクを使って解説していくというもので，つぶやきによる解説担当が3名（鉄矢・真木・笠原），5歳児（男児2名，女児4名，計6名）の子ども達と保護者（8名）や職員（8名），大学からは観察者（小室・加山）が加わり総勢27名がこの夕方

の会に参加した。子どもたちは午前中から夕食の餃子ピザの準備をしたり，クッキングをして食べたり，夜のプレイパークのアクティビテイを楽しんだりした後に，この親子ワークショップを楽しみ，「星空パーティー」は素敵な親子の体験になった。当日は開始時間が遅いために，実施直後に保護者と振り返りを行う時間はなかったが，保護者にアンケートを依頼しており，解説者と観察者による実施後の振り返りとこのアンケートのコメントをもとにこの試行的実践を考察した。

（真木千壽子）

２．１　実践のコンセプトと方法

今回の試行的実践「ならべる，つなげる，つみあげる―子どもの成長に立ち会おう―」のワークショップは，“新しいモノと初めて関わる（ファーストコンタクト）人間の状態とそれからの変化をわかりやすく参加者の目の前で再発生させること”を手段として位置づけ，“保育者や保護者が園児たちの多様な感性や個性に気づき，子ども理解を深化させること”を着地点としてワークショップデザインを行った。特に“わかりやすく参加者の目の前で再発生させること”を実践のコンセプトとした。

このワークショップデザインの背景には，18年前に美術教育者の入り口に立った筆者の驚きと感動に基づいている。美術教育者にとっては日常である子どもたちの，「素材との戯れ」「夢中で並べる」「失敗が工夫を生む」などの行為を図画工作の先生としてサポートしつつ，コントロールもしている教師の姿が，筆者には新鮮だったことを今でも鮮明に記憶している。同時にこの経験にある“よそ者の視点”を美術教育者側の人間となり当たり前のこととして埋没させることのないように留意している。

今回のアクションリサーチの手法として，実体を前にリアルタイムでマイクとレシーバーという音声で共有する策は，東京学芸大こども未来研究所で幾度も企画（未実施）として挙がった手法であった。今回の実践では笠原，真木，鉄矢の３名の違う視点のつぶやきという選択肢ができたことは良かったが，それぞれつぶやく３名の情報共有は難しかった。一方で園児たちの多様な感性や個性をワークショップという時間の流れの中でその場面に立ち合っているつぶやき者を選択しながら保護者がつぶやきを共有できた。ローテクであるICTハードウエアのラジオとFMワイヤレスマイク（ヘッドセット型）はコストやスマートフォンとの連動など可能性を感じるアクションリサーチのツールであった。

プログラムの時間と人数とコンセプトから子どもたちのファーストコンタクトの対象としてシティーブロックスを選定した。「はじめての木製ブロック」ということは，それぞれ園児の家庭の木製ブロックの所有事情も考慮しなくてはならず，その下調査は過負荷であったため，「はじめての大量木製ブロック」とすることで，参加する園児の今までにない体験素材とのファーストコンタクトを企てた。シンプルな形状，手触り感，色彩感，（ぶつかる）音感など，十分なポテンシャルをこのおもちゃが持っていることは，2014年6月に岡山のおもちゃ王国で開催した「積み木遊び」（木のおもちゃフェスティバル内）で確認済であった[1)]。具体的には，用意したシティーブロックスの半分の量を，子どもたちの前で箱をひっくり返して木のぶつかり合う音と共に出現させた。子どもたちの最初の興奮が終わるか終わらないかの間合いで残りのひと箱分のシティーブロックスを加え，子どもたちのファーストコンタクトが始まった。

（鉄矢悦朗）

２．２　実施体制と役割分担

実施体制は，真木が全体の統括を行うとともに活動全体の調整や保護者対応を担当した。鉄矢と笠原が真木とともに子どもの様々な遊びの中の様子を捉え，保護者に向けてFMワイヤレスマイクを通して解説を行った。FMワイヤレスマイクだけではなく，保護者と会話をする場面や子どもと関わる場面もあった。解説では，子どもがシティーブロックスから発想を広げて遊びを広げていく姿を捉えてつぶやき，目の前で起こっている姿から子ども理解につなげていくものである。小室と加山は全体の撮影・記録を行い，子どもとの遊びに加わる場面もあれば，保護者と会話をする場合もあった。同時に機器の調整や保護者への機器のサポートも行った。

（小室明久）

３．ワークショップの内容

３．１　活動展開

シティーブロックスを一番大きな保育室の広場に用意してワークショップが始まった。シティーブロックスの箱を子どもたちの前でひっくり返し，子どもや保護者と一緒に箱から広げていった。子どもは床一面に広がったシティーブロックスに寝転がったりしながら，全身を使って遊び始めた。保護者も子どもと遊びながら片方の耳で解説を聞いている（図１）。

図１　子どもたちが遊ぶ中で解説を聞く保護者の様子

次第に子どもたちはそれぞれの遊びへと展開していった。シティーブロックスを並べ，ドミノにしていく様子や（図２），床に仰向けに寝転がり，シティーブロックスを並べてその形を縁取る遊びなどが見られた（図３）。

図２　シティーブロックスを並べていく様子

図３　友達の周りにシティーブロックスを並べていく

遊びはグループでも行われた。シティーブロックスが入っていた箱を利用し，シティーブロックスの赤い色を肉に見立ててバーベキューごっこを始める子もいた（図４）。

図４　バーベキューごっこの様子

バーベキューごっこは保育士や保護者も巻き込み，一緒に焼いて食べたりして遊んだ（図５）。また，子どもとではなく，保護者と一緒に積み重ねて遊び始める子もいた（図６）。親子で積み上げたシティーブロックスは子どもの身長を越え，保護者が肩車をして積み上げた。

図５　大人も一緒にバーベキューごっこを始めた

図６　保護者とシティーブロックスを積み上げる

積み上げたシティーブロックスは最後に崩れ落ち，見ていたみんなが歓声を上げた。ここで活動も一区切りの時間となり，今度は箱にシティーブロックスを戻

す遊びを楽しみながら親子で片付け，最後に記念撮影をして解散となった。

（小室明久）

４．実施後の振り返り

４．１　解説者（鉄矢）のコメントから

遊びは子ども個々，子どものグループ，保護者や保育者と一緒といった，様々な形で広がりを見せた。鉄矢は解説の中でシティーブロックスの遊び方に着目した。協力して並べたり，つなげたりする中で生まれてくる形からイメージを広げて遊んでいる子どもの状況やプロセス，シティーブロックスの色に着目してその色を何かに見立てて遊び始める様子などを取り上げていた。また，形や色から造形的に遊びを広げることができるシティーブロックスの特性によって子どもがアイディアや着想を得て新しい遊びを生み出していることなども解説していた。

鉄矢によれば，この遊びではシティーブロックスの特性を子どもが十分に体験することが大切だという。触り，並べ，積むといった様々な行為が遊びを豊かにする点に着目して見ていく必要があるとする。実際，子どもたちはシティーブロックスの赤色をお肉に見立ててバーベキューをして遊んだり，黄色をお金に見立てて箱にせっせと集めていた。いずれもシティーブロックスの色や，四角い形が「並べる」ことをイメージさせていると言える。こういった遊びの展開は最初から行われていたわけではなく，シティーブロックスに触れたり，並べたり，積んだりする行為の中から徐々に生まれてきたものである。そしてこうした遊びのイメージを友だちや大人と共有しながら，協力しつつ新しい遊びを生み出していった。また，鉄矢は子どもから発せられた言葉を受け止めることが重要だともいう。子どもの「見て」という言葉や「ほら！」という言葉を聞き，それに反応して共感的に受け止める大人がいることによって子どもは遊びを豊かにしていくという。

〔コメントからの考察〕

振り返りでは，子どもの声を受け止めることによって子どもがより遊びを充実させていくという話があった。そして，子どもを受け止めることとは子どもの言葉を文字通りに理解して返答するということだけではなく，むしろ大人が子どもの声が発している，「楽しいよ！」「面白いよ！」という感情や何かを発見したり，何かを形にできた喜びの感情をキャッチし，そこに応答していく姿勢を持つことが，関わり合いやコミュニケーションとしては重要である。

活動の最初の段階では一人で遊んでいる子どもが多くいた。シティーブロックスの形や色，そこから何か遊びをつくりだせること，そしてシティーブロックスが大量に部屋にある，ということだけで夢中になっていたとも言える。しかし，遊びが広がり深まっていく中で，バーベキューといった見立て遊びに変化するなど，個々での活動だけでなく，周囲の友だちや大人も関わり合いながら遊びが展開していった。バーベキューに参加した大人はシティーブロックスを前にして，ナイフで切る「ふり」をし，口に入れて食べる「ふり」をした。子どもも一緒になって焼いたお肉を美味しそうに食べる遊びを一緒にしていた。シティーブロックスの色や形に着目し，発想された遊びから生み出される子どもの遊びやその視点を保護者がキャッチし，子どもの様々な遊びやその姿を受け止めるという姿勢が，遊びを媒介にしたコミュニケーションを機能させ，子どもの遊びを充実させ，遊びがどんどん広がり，深まっていく要因となっていた。解説による子ども理解はもちろんだが，このようにして「共に遊ぶ仲間」に「なっていく」ことで見えてくるものがあり，そこに解説が加わることで一緒に遊んだ体験を通して感じたことや捉えた子どもの姿が一体何だったのかをより深く知ることができるのである。

（小室明久・笠原広一）

４．２　解説者（真木）のコメントから

最初は大勢の大人と部屋一面に広がるシティーブロックスに戸惑っていた子どもたちも次第に緊張が解けて遊びだし，並べたり，つなげたり，積み上げたりしながら遊び始め，焼肉屋さんや寝ころがったポーズの人型にシティーブロックスをつなげて囲ってみたり，ピタゴラスイッチのように長く並べ，順に倒れていくのを楽しんだりしていた。傍で見守ってくれる大人の応援や参加もあり，やる気も十分で，夢中になって遊び込み，遊びがどんどん発展していった。遊びのクライマックスはA君が少しずつ積み上げていたシティーブロックスが身長よりも高くなり，そこにB君が加わり，互いに椅子を持ってきてドンドン積みあげていった。それでも手が届かなくなりそうな時に，それを見ていた二人の父が登場し，B君の父がとっさに肩車をした。すぐにA君の父も肩車をし，シティーブロックスは最高の高さに積み上がった。会場も大いに盛り上がり，「がんばれ！がんばれ！」の応援の声があふれた。A君もB君も慎重に積み上げる。そのとき，「アッ！」という声とともに，音を立てて崩れ落ちた

シティーブロックス。そこにみんなの拍手が沸いた。A君とB君も満足顔で，抱きしめる父たちも嬉しそうな笑顔であった。見ているみんなも心が一つになった瞬間だった。

〔コメントからの考察〕

今回の「子ども理解を深める親子ワークショップ」から省察できることは，椎塚（2013）が言うように，「心地よさ，美しさ，おもしろさ，楽しさ」などのポジティブな情動や心の働き（反応）を「感性」と呼び，感性とは「心のフィット感」を生み出す作用であるとするならば，今回のワークショップの体験は遊びの中で個々の気持ちに何かフィットするような楽しさや気持ちよさが感じられた体験であったように思う。

一方で，参加者相互のコミュニケーションのもつ情動的な側面でのつながりに着目するならば，参加者相互の「あいだ」にある気持ちの触れ合いやつながりといった「感性的コミュニケーション」（鯨岡，1997）が相互の間に共有され，それが遊びをより発展させていったように思う。いずれの場合も「感性」が媒介する遊びを通したコミュニケーションがこのワークショップの特徴だったと考える。そのため，子どもと保護者，保育者，大学教員，院生など，ワークショップの参加者と解説者との関わり合いや，そこに生まれる体験の質や意味を問うことによって，この体験の感性的な部分が感じ取られ，それが次の行為や関わりへと折り返されていくことで相互主体的に関わり合い，遊びが深まっていく実践になっていたと考える。つまり，言葉だけでなく，それ以外の子どもの感性的な動きが，シティーブロックスでの遊びを通して参加者相互の「あいだ」に伝わることで共鳴が起こり，一つの気分が共有できたのである。それがこの「親子ワークショップ」から学ぶ「子ども理解」の形であり，その方法なのではないだろうか。

（真木千壽子）

４．３　解説者（笠原）のコメントから

笠原は何気なくシティーブロックスの上に寝転んで手足を動かしている子どもの様子から，特に今の段階で作りたいもののイメージがあるわけではないが，さしあたって広がったシティーブロックスの上に寝転がりながら「ゆるゆると遊ぶ」ことを楽しんでいる，試しているという様子を解説した。それは子どもの遊びが必ずしも最初から何かを形にしようという明確な意思を持ってなされるわけではないことや，そうして「ゆるゆると遊ぶ」中で何かを思いついたり，他の子がやっていることが目に入ったり，それを見ている周囲の反応から次の遊びや行為が生まれることもあることを保護者に解説した。一見すると明確につくりたいものがないように見えるこのような様子も，実は子どもの遊びの姿である。また，子どもたちが塔のようにシティーブロックスを積み重ねてはそれらを崩している場面も，「せっかく」積み上げたものを「崩す」「崩れてしまう」ことの面白さや，それで子どもたち同士が盛り上がっている場面なども，完成を目指すこととは逆の方向に遊びが向かうことも（が）「遊び」であり，「それを子どもは楽しむ」ことを解説した。保護者もかつては子どもであり，当時は自分たちも多かれ少なかれそうした遊びを楽しんでいたはずであるが，大人になった今ではそれを当時の気持ちのようには見られないわけである。そのギャップに焦点を当てて解説していた。そのこともあり，今回は実施そのものが遅い時間帯であったために見送らざるをえなかったが，やはり活動後に保護者との振り返りを行う時間が必要だったと反省点を述べている。解説者側からの視点だけでなく保護者の感じたことや，親子が時間を共にする「星空パーティー」という普段とは異なる場の中での遊びを通して見えてくる子どもの姿を，保育者と保護者と大学教員など子どもに関わる大人達が共に共有していくことで，子ども理解がより多面的かつ重層的に深まり，園がより一層，共に子育てを支えていくコミュニティになっていくのではないかという。

（小室明久・笠原広一）

〔コメントからの考察〕

子どもの遊んでいる姿の中にある，子どもの状態，遊びのちょっとした仕草や試みの中にある工夫や発想を捉え見つめ直すことで，子どもへの視野が広がり，子ども理解が深まっていく。それは子どもの新たな一面を浮かび上がらせることでもある。今回，課題として挙げられた保護者との振り返りの時間がもしあったらならば，子どもの多面的な姿を共有することができ，子ども理解をより深めることができたであろう。園やワークショップでの子どもの姿だけでなく，そこに家庭での子どもの様子や友だちとの遊びの別の姿も重ねられ，友だちや保護者といった様々な人と関わる遊びの中でより多面的かつ多声的な子どもの姿が浮き彫りになっていくと考える。遊びを共に行い，保護者と保育士が一緒に省察を深めることで，新たな子ども理解と共に，子どもを捉える新たな視点を共有することができるはずである。一緒に活動に関与したからこそ生み出せる理解であろう。また，別の親子との関わりを持つことで保護者自身も普段の家庭環境の関わり方とは異なる場に身を置き，新たな子どもの姿や様子を捉

える機会ともなろう。そしてこうした取り組みが，子ども理解を深めていく環境を構成し，共に子育てを支えていく環境づくり，場づくり，コミュニティづくりにつながっていくことが期待される。

（小室明久）

４．４　観察者（小室）のコメントから

今回の活動は，保育者，保護者，解説者，大学院生などの様々な立場の大人が参加するワークショップとなった。活動の様子では，個人による遊び，グループでの遊び，子どもだけのグループもあれば大人もいるグループもあるなど，多様な活動形態が生まれた。シティーブロックスを中心に場に集った参加者が相互に影響を与え合う場となっていた。今回のワークショップは子どもの遊びが流動的に多様に変化していくものであり，解説者は刻一刻と動く子どもや場の姿を捉えて解説していた。大人も子どもと一緒に遊ぶことで遊びの中からその展開を感じ取り，解説を通して気づき考えることによって，子どもへの見方それ自体を更新していく機会となった。それが可能になったのは大人も遊びの中で自由な形で参加することができ，あるがままの子どもの姿を感じ取ることができた自由な雰囲気と環境があったからであろう。

（小室明久）

４．５　観察者（加山）のコメントから

今回の活動ではパーティーとシティーブロックスを用いた親子ワークショップにカメラで撮影を行いながら観察者として参加した。子どもたちはパーティーでは三角巾とエプロンを着けて好きな具材を選び思い思いにトッピングした餃子ピザを食べながら，いつもとは違った特別な夜の活動を楽しんでいた。隣の部屋ではお迎えを待つ別のクラスの子どもたちが，何か楽しそうなことをしているようだぞという表情で，羨ましそうにドアのガラスに張り付くようにしてこちらの様子を覗いていた。シティーブロックスを用いた親子ワークショップが始まると，子どもたちはたくさんの大人が見守る状況に少し戸惑いながら，床一面に広がったシティーブロックスでどんな風に遊んでみようかとブロックの上に寝転がったり，ブルドーザーのようにかき分けて進んだりしながら探っている様子だった。周囲の保護者も同じように，初めはどのように活動に参加していこうか戸惑うようにも見えたが，イヤフォンから聞こえる解説を聞くうちに子どもたちの様子を理解し，初めは遠巻きに観察していたが徐々に子どもに話しかけたりブロックに触れたり，子どもの斬新な発想に感嘆の声を漏らしたり，解説を行う教員に質問をするなど自然に活動に参加していく様子が見られた。今回の活動ではシティーブロックスの色彩の美しさが活動に広がりを持たせていることが印象に残った。子どもたちが寝転んだりかき分けたりする様子から，綺麗に紅葉した枯葉の絨毯を連想した。焼肉屋さんの見立てをしている子どもたちが並べたピンクとオレンジのブロックは，新鮮なお肉と短冊に切られたニンジンにそっくりに見えた。金庫に見立てたボックスに大事にしまわれていた黄色いブロックはお金にも金塊にも見えた。ブロックの形態と色彩は子どもたちに様々なものを連想させ，それを見た大人たちが思わず巻き込まれてしまうような説得力を持っていた。初めの戸惑いが嘘のように一体感が増し，子ども，保護者，保育者が同じ目線に立って活動が進んでいった。

（加山総子）

４．６　解説者と観察者のコメントと考察から

三人の解説者はそれぞれ，鈇矢は子どもがシティーブロックスの形や色をどのように用いて遊びを広げていったのかという造形的な視点から子どもの活動を捉えて解説し，真木は親子が活動を通して共鳴している相互の気持ちのつながりを捉えて解説し，笠原は大人から見れば目的をもって行動してないような何気ない遊びの姿を取り上げて解説を行った。ワークショップ中の解説は三つの異なるFMチャンネルで発せられるため，同時に三人の解説を聞くことはできないが，適時受信機のチャンネルを選択して異なる視点からの解説を聞くことができた。振り返りや全体の時間進行などに課題があることは確かだが，実際に子どもと一緒に遊ぶことで，かつリアルタイムのその状況の中での「捉え」や「視点」を解説されることで，「子どもの成長に立ち会おう」というねらいは，保護者にもうまく体験してもらうことができたと考える。そしてシティーブロックスと，友だちと，保護者や保育者と関わる中で生まれる様々な遊びと場の変化を，そして子どもたちの工夫や気持ちや言葉では語られない試行錯誤を，わかりやすく参加者の目の前で再発生（理解と共に見える状態）させる状況を生み出したと考える。

親子が一緒に活動する親子ワークショップに取り組む吉川（2017）は自身の実践の考察の中で，親子の関わり以外にも着目し，「実践を重ねることで子どもは『場』に慣れることで，親や保育者だけでなく，他の子どもの親や子ども同士で関わり，会話や道具をやりとりする様子や行為を真似する姿が見られた」（p. 464）とし，また，「子どもの行為が生まれ，表現を生

み出す『環境構成』においては身体という『物的環境』と子どもの表現を受けとめる親の『人的環境』によって，『場』そのものを共有し，共に文化をつくりだしていたといえよう」（p. 464）と述べ，活動を共にする中での親の関わりを重要な環境構成の一つとして捉えている。その点では単一の視点からのみの解説ではなく，造形的な視点，情動的な視点，行為理解の認識にまつわる視点などが折り合わさって，立体的で動的な，つまり，より実際の遊びの状況に近い中での子ども理解の状況が生み出されていたのではないかと考える。

本ワークショップは相互に影響を与え合う環境であったため，同時にそこに課題点も挙げられる。たとえば，参加者の参加の仕方や関わり方の自由度が高いために，保護者の選択できる活動が多くなる点にも難しさがあるとも言える。三人が解説するとはいってもその視点にはやはり限りがある。保護者は子どもとの遊びを見ることもできれば，一緒に遊ぶこともでき，解説を中心に聞くことも選択できる。もちろんシティーブロックスでの遊びや解説を聞く以外のこともできる状況にある。そうかといって子どもも自由に関わってくるために，解説をじっくり聞きたいと思っても聞くことだけに集中することも難しい。実施直後に保護者との振り返りを行えていないためにその点がどうであったかを確かめることはできないが，親子の遊びを通したワークショップでは様々な出来事が同時に起こるため，その点で実際にどうであったかは次回のワークショップでは事前に注意が必要であろう。家庭での様子とは異なる姿や活動で気付いたことを共有するためにも，保護者との意見交換が必要であろう。そのような場を持つことによって保育士と保護者の子ども理解の共有が進んでいくはずである。

（小室明久）

5．保護者アンケートの結果と考察

事後に保護者に行ったアンケートの質問事項は，①「本日のワークショップはいかがでしたか」というワークショップ全体の感想，②「子ども理解に関して感じたことやお気づきになった点などはございましたか」という子ども理解への質問，③「今回の活動について感想等お願いいたします」の三点である。参加家族がもともと6名と少ないが，内4名から回答を得た。

①本日のワークショップはいかがでしたか

この質問に寄せられた回答（記述）の中には，

自分の子供が集団の中でどのような遊び方をするのかがよく分かるだけではなく，毎日一緒に遊んでいる同クラスのお友達のそれぞれの特性もうかがって非常に楽しく学びの多い時間でした。

といった感想があった。集団での活動やそこでの様子の解説があることで見えてくる子どもの姿があったという。自由に参加可能なことで子どもと自然に関わりをもつことができたという意見もあった。より普段のあるがままの姿や，子どもの話から推察される普段の園での様子により近い状況の中で我が子を見ることで，家庭での姿とは違う発見があるのであろう。また，

遊びをじっくり観察して，遊びについて考える時間が日常生活には無いので，貴重な楽しい時間でした。

という意見からは，子どもと遊ぶだけでなく，解説やワークショップ全体を通して子どもの遊び（の姿）を考えてみるということで，子どもの遊びに対しての見方が変わっていったことが窺える。

他のご家族とお友達と先生方と一緒になって同じ遊びに参加するというのは珍しい機会で，いつもの送迎の前後で会話するとかイベントで一緒に過ごすとかとは違ってみんな楽しく遊べた所が良かったと思います。

という意見には，子ども理解のワークショップであることはもちろんだが，これ自体も保護者同士での貴重な交流であったことも見えてくる。

②子ども理解に関して感じたことやお気づきになった点などはございましたか

この質問についての回答（記述）としては，

（前略）気がつくとお互いに興味を持って合作・空想の世界へ…というフローを一緒に体感し今後の子供の遊びに対する見方に大きく影響を受けたと思います（後略）。

という意見があった。子どもの遊びを大人は普段もよく見ているが，遊びを一緒に体感することで，自身の遊びに対する見方に影響するような発見や気付きがあったことが窺える。

③今回の活動について感想等お願いいたします

最後の感想では解説に関する意見があった。

解説付きのおかげで，まずは触るところからアプローチする子供たちの様子を見ては感心し，そのうち個人と個人が共鳴しはじめる様子を見ては感心し，その瞬間を親たちも遊びながら体験できました。とても良かったと思います。

このように，このワークショップの狙いやアプローチが実際に保護者にとって子どもの遊びの姿をつぶさに捉えてその意味や意図を理解し，さらに他の子どもや大人たちとの相互的な関わり合いや場の変容，そこに共鳴が生まれ，遊びが大きく変化していくプロセスが，解説や自身の参加によって実感を伴って理解することができた保護者の姿が現れている。家庭だけでは見ることができない子どもの姿や，遊びやワークショップなどの活動を共同で行うことを通して生まれる新しい遊びに保護者も携わることができる点を挙げている意見もあるように，保育そのものは子どもの育ちを支え促す場だとしても，保育園に子どもを預けている数年間の間に，園のサポートがあるからこそ，子どもと共に遊び，過ごす楽しさを十分に感じられるような体験が用意されることが保護者にとっても必要なのかもしれない。そうした楽しみを伴った関与を通して，場の，体験の内側から，共に感じることで，様々な発見や子ども理解が更新される体験が得られることを，これらのアンケートの言葉は示唆している。

（小室明久）

6．まとめ

今回の「ならべる，つなげる，つみあげる―子どもの成長に立ち会おう―」のワークショップの実践は，保護者に新たな子どもの姿や，子どもの遊びについての理解を生み出すことができた。参加者数は多くはないが普段の子どもの姿を知った保護者と保育者，いつもの友だちがいる遊びの場だからこそこうしたワークショップは可能になったのではないだろうか。解説や説明で理解できることもあれば，こうして実際に参加者として共に遊ぶことで感じることや気付けるものがある。その両方をより深く知るという点では今後改善が必要であることも確かである。保護者のアンケートの回答を読むと，やはり一緒に振り返りができればよかったと思うところはあるが，このワークショップが意図した子ども理解が参加した保護者に実際に起こることは確認できたと言える。新たな理解は子どもについてのみならず，子どもの遊びについての見方に対しても生まれていた。この活動が大人にとっての学びの場となっていただけでなく，子どもを育てる家庭が集い，園がそれをつなぐ場になっていくという，子育てのコミュニティがつくられていく実践にもなっていた。

今回の親子ワークショップは短時間の実践であったが，子ども理解の学び合いが生まれる一つの方法や形を示すことができた。就園前の乳児や未満児親子の子育て支援とは違い，5歳児という自立と自律が育ってきたこの時期だからこそ，一緒に遊ぶことで感じ取ってみるという学び方には意味がある。多様な子どもの発想や工夫，試み，意図，まだ形になっていないアイディアなどを懐深く受け止められる遊具や素材を用意することで，様々なアレンジを加えつつ園の取り組みに応じて実施できるだろう。

子どもと楽しい時間を共に過ごす保護者，保育者らのこうした時間が，様々な個性や感性をもった子どもの存在と姿を受け止め合う場を形づくる。多様な感じ方や考え方，発想やアイディアを肯定的に受け止め合い，ユニークな一人ひとりの存在と育ちを支え合う保育と子育て支援のコミュニティが形づくられていく上で「共に遊ぶことを通した学び」が持つ力は大きい。次回はぜひともじっくりと時間をとり，保護者とじっくり聞き合い語り合う時間も持つことで，こうした実践を深めていきたい。

（笠原広一）

謝辞

ご協力いただいた特定非営利活動法人東京学芸大こども未来研究所の皆様，学芸の森保育園の職員及び保護者の皆様に御礼申し上げます。本研究は「公益財団法人日本生命財団 平成29年度委託研究（課題名：幼児教育における子どものアート活動を媒介とした多様性の涵養と親の学習支援プログラムの構築）」の助成によるものです。

註

1）https://youtu.be/HW31U3e0HyY（最終アクセス日 2019年6月17日）

文献

Edwards, C., Gandini, L. and Forman, G. (1998) Hundred Languages

of Children: The Reggio Emilia Approach to Early Childhood Education, Ablex Publishing Corporation.（佐藤学・森眞理・塚田美紀訳『子どもたちの100の言葉―レッジョ・エミリアの幼児教育』世織書房.）

笠原広一（2005）「イタリア，レッジョ・エミリア国際会議2004：幼児教育の現在・芸術教育の未来」瓜生通信（30），京都造形芸術大学瓜生通信編集委員会，pp.12-17.

笠原広一，小室明久（2017）「学芸の森保育園との連携造形活動2017年度活動報告書」東京学芸大学教育学部 笠原広一研究室.

笠原広一，真木千壽子，鉄矢悦朗，小室明久，塚本万里（2018）「造形活動を通した子ども理解の共有化に向けた基礎的知見の産出:学芸の森保育園での連携造形活動と作品展の保育者と保護者のアンケート分析から」東京学芸大学紀要 芸術・スポーツ科学系70，pp. 65-81.

鯨岡峻（1997）『原初的コミュニケーションの諸相』ミネルヴァ書房.

椎塚久雄（2013）「序章 感性とは」椎塚久雄編『感性工学ハンドブック―感性を極める七つ道具―』朝倉書店，pp. 1-10.

森眞理（2016）『ポートフォリオ入門』小学館.

諸川滋大，高橋健介，相馬靖明編著，利根川彰博，中村章啓，小林明代著（2016）『保育におけるドキュメンテーションの活用』ななみ書房.

吉川暢子（2017）「身体を使った造形表現の展開と環境構成―親子を対象とした表現遊びの事例から―」『美術教育学研究』第49号，pp.457-464.